

英語語法文法学会 第30回記念大会資料

日 時： 2022年10月15日（土）10:30–18:00

開催方法： オンライン開催

U R L： <http://segu.sakura.ne.jp>

今年度はオンライン開催となります。

- ・「総会」と「ワークショップ・研究発表・記念講演」とでは開催方式が異なります。
- ・「総会」は10月15日（土）10:00～10月21日（金）18:00の間、プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します。質疑応答は公開期間内にメール交換で行います（segu.office@gmail.com）。
- ・「ワークショップ・研究発表・記念講演」はZoomを利用して行います（質疑応答を含む）。
- ・アクセスのためのパスワード等は会員の皆様に郵送で通知いたします。

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2022

英語語法文法学会

第 30 回記念大会プログラム

日 時 : 2022 年 10 月 15 日 (土) 10:30-18:00

今年度はオンライン開催となります。

・「総会」と「ワークショップ・研究発表・記念講演」とでは開催方式が異なります。

・「総会」は 10 月 15 日 (土) 10:00~10 月 21 日 (金) 18:00 の間、プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します。質疑応答は公開期間内にメール交換で行います (segu.office@gmail.com)。

・「ワークショップ・研究発表・記念講演」は Zoom を利用して行います (質疑応答を含む)。

・アクセスのためのパスワード等は会員の皆様に郵送で通知いたします。

大会実行委員 : 吉田幸治 (委員長)、吉川裕介 (副委員長)、松原史典、
林龍次郎、住吉 誠、出水孝典

総会（本学会ウェブサイト）

開会の辞／学会賞・奨励賞選考報告…会長 中澤和夫（青山学院大学名誉教授）
事務局報告……………事務局長 西脇幸太（愛知文芸学）
会計報告……………会計 佐藤健児（日本大学）

ワークショップ（Zoom）10:30－11:45

司 会 松原史典（京都女子大学）

1. 「Could care less にかかわる語用論的要因」……………大野真機（昭和大学）
2. 「派生名詞 slowness の統語と意味」……………桑名保智（旭川医科大学）
3. 「「主動詞＋a look (at)」の意味と語法」……………井口智彰（大島商船高等専門学校）

研究発表（Zoom）13:00－14:45

司 会 山岡 洋（桜美林大学）

1. 「補文を伴う非人称 it 構文に現れる time の用法について
—述語 possible との比較を通して—」……………寺山里穂（金沢大学大学院）
2. 「be about to に関する一考察」……………岡 麟太郎（日本大学大学院）
3. 「文副詞 wisely の記述的考察」……………西村知修（石川工業高等専門学校）

記念講演（Zoom）15:00－18:00

司 会 会長 中澤和夫（青山学院大学名誉教授）

1. 「実証的英語学研究の一方法」……………八木克正（関西学院大学名誉教授）
2. 「人は世界をどのように認識し、ことばにしているか」
……………安井 泉（筑波大学名誉教授）
3. 「語法・文法研究から語用論へ、あるいは語用論から語法・文法研究へ」
……………内田聖二（奈良大学特命教授）

閉会の辞 佐藤健児（日本大学）

Could care less にかかわる語用論的要因

大野真機 (昭和大学)

Couldn't care less という表現は「まったく気にしない」の意を表わすが、アメリカ英語では not が脱落した could care less の形式も (特に口語では) 使われ、同じ意味を伝達するものとしてその使用は広がりを見せている (Garner 2016). Huddleston and Pullum (2002:823) はこうした変化は決して珍しいものではないとし、類例として I don't know beans about it. と I know beans about it. を挙げ、ともに "I don't know anything about it" の意味で使われると述べる。Could care less が「まったく気にしない」を表す表現として成立することについて、本発表は語用論的なアプローチを追求する。具体的には、「気にする」(because P, Q) などの肯定的予想が会話の含意により引き起こされた否定の作用域に入ると $\neg(\text{because P, Q})$ となり、これを König (1991) および König and Siemund (2000) での推論に従い展開すると although P, $\neg Q$ となることから、could care less には (文字通りの意味の他に文脈に応じて) 「気にしない」の意が備わることを主張する。そして、could care less は元々は会話の含意 (例えば皮肉など) として「気にしない」を表していたが、この使用が定着するにつれて couldn't care less との意味上の差異が消滅していったことの可能性を探る。

派生名詞 slowness の統語と意味

桑名保智 (旭川医科大学)

本発表は、派生名詞 slowness と後続する句との関係について統語的、意味的な記述を行うことを目的とする。先行研究によると、以下の(1a)と(1b)が示すように slowness は不定詞(to V)に後続されるが、前置詞 in と動詞の ing 形によって構成される前置詞句(in V-ing)には後続されないとされている(安井・秋山・中村(編)(1976)、小西(編)(1989)、八木(1998))。

(1) his slowness {(a) to react / (b) *in reacting}

(1)の対比は、次の事実を考慮すると興味深い。形容詞 slow は叙述形容詞として使われる場合、to V、in V-ing、動詞の ing 形(V-ing)に後続される。その一方で、派生名詞 slowness はなぜ to V のみが後続でき、in V-ing は後続できないのだろうか。また、V-ing は後続可能なのだろうか。本発表では派生名詞 slowness は後続する句として to V、in V-ing、V-ing のいずれも可能であることを示すデータを観察する。また、後続する句の形式及びその V の意味と slowness の意味との関係について考察する。

「主動詞＋a look (at)」の意味と語法

井口智彰（大島商船高等専門学校）

「take [get, have, cast, shoot, steal, give, throw] a look at...」は「ちらりと見る」(G5)と定義されているが、その使用実態は異なる。本研究は主動詞が have, take, give の構文(軽動詞構文)だけでなく、それ以外の動詞の構文についても、コーパス等の事例を用いて調査を行った。それぞれの構文はどのような状況で用いられる傾向があるのか、以下に記すのはその意味的特徴の概略である。

(1) have, take: Have a look (at) this!のような命令文の事例が半数以上あり、過去形は15%程度の使用頻度で小説・雑誌などの事例が多い。

(2) give : give a look と give someone a look の2つがあり、後者は行為者の視線に見られた側が気付く(Dixon2005)という意味が含意されており、現在形ではなく、過去形で使用される。

(3) get:対象が実際に見えたかどうかという行為の結果が重視されるため、good や better などの形容詞が高頻度で共起する。

(4) cast, shoot, throw: 主に文学作品などの書き言葉で使用される。cast は形容詞が共起する事例が共起しない事例よりも多い。

(5) sneak, steal: 動詞の中に既に様態的な要素が入っているため、形容詞が共起する事例が少ない。基本的に命令文は容認されない。

補文を伴う非人称 *it* 構文に現れる *time* の用法について
— 述語 *possible* との比較を通して —

寺山里穂 (金沢大学大学院)

本発表では、(1a,b)のような述語 *time* と補文節 *that* や *for NP to* 不定詞を伴う2つの非人称 *it* 構文を扱う。

(1a) *It is time for it to happen again.* (COCA)

(1b) *...it is time that serious consideration is given to the industry...* (BNC)

COCA と BNC の2つのコーパスを使って調べたところ、両構文において述語 *time* は共起頻度が高いにも関わらず、先行研究 (Quirk et al. 1985, Dixon 2005) では非人称 *it* 構文との共起語彙として取り上げられていない。

本発表では、先行研究でもよく取り上げられ、頻度も高い *possible* の事例と比較することによって、*that* 補文節 (直説法現在形) を伴う非人称 *it* 構文と *for NP to* 不定詞を伴う非人称 *it* 構文に現れる *time* の用法について、その特徴を明らかにし、2つの構文間での意味の差異について考察する。具体的には、2つの構文の補文の主語に存在の *there* が生じるかどうかで、*possible* と *time* では違いがみられることを指摘し、その動機づけを探る。また、*that* 補文節を伴う非人称 *it* 構文では、*time* の用法と *possible* の用法の間に意味的なつながりが見られる点も明らかにしたいと考える。

be about to に関する一考察

岡 麟太郎 (日本大学大学院)

be (not) about to の「推量用法」と「意志用法」の解釈について考察する。

(1) a. **We are about to carry out this project next year.* [推量]

b. *We are about to move next week, so we are very busy preparing.*

(2) *I've never smoked in my life and I'm not about to start now.* [意志]

be about to の表す近接未来は、現在時領域 (*now*) を大前提とするため、(1a) のように未来を表す副詞語句とは共起しないとされる (Cf. 江川 1991³: 225)。しかし、実際には事情が異なる。(1b) のように、未来を表す副詞語句と共起する例が散見されるからである。(1b) では、*be about to* は現在時領域を離れ、話者の主観的近接性として遠い未来の事柄でも表すことが可能である。この「話者主観」はどこから生じるのであろうか。また (2) のように、*be about to* の否定は近接未来ではなく、「～するつもりは毛頭ない」という「強い意志否定」としての解釈となる (Cf. Fowler 1996: 8)。

本発表では、*be about to* の「話者主観」の支えとなる要因を明らかにする。これに加えて、否定環境 (*be not about to*) では、近接性よりも意志性が優先される原因を「主観」の観点から言語資料に基づき考察を進め、*be not about to* は「意志用法」のみであることを主張する。

文副詞 wisely の記述的考察

西村知修（石川工業高等専門学校）

文副詞として機能する wisely は、主語指向副詞(Jackendoff 1972)や価値判断の主語副詞(中右 1980)と呼ばれ、特に様態用法との比較を通して生起位置と意味機能との関係が明らかにされてきた。しかし、wisely が具体的にどのような環境に生起するのかについての記述は、小西(1989)を除きあまりないと思われる。

本発表では、not や助動詞の左側に生じ、生起位置から文副詞である可能性が非常に高い wisely を COCA から抽出し、cleverly、foolishly、stupidly などと比較をしながら特徴を把握することを試み、主に以下の3点を論じる。①wisely は3人称主語の文に生起する強い傾向がある。他の副詞との比較を通して、2人称主語の文に生起しにくい原因は主語副詞に共通した新情報を提示するという機能(鈴木 2017)にあり、1人称主語の文に生起しにくい原因は wisely の語彙的特性にあると考える。②wisely は選択を表す choose などの動詞を好む傾向がわずかにある。③wisely の後方命題には、wisely の前方命題から十分予想できるものがくる傾向があり、予想外の命題をつなぐことは少ない。

記念講演 (Zoom) 15:00-18:00

実証的英語学研究の一方法

八木克正 (関西学院大学名誉教授)

私は『英語年鑑』「回顧と展望」欄の「語法・辞書の研究」を11年間(2011-2021)担当し、執筆のために多くの著書・論文・辞書を読んだ。そして、英語語法文法研究の対象と研究方法の多様性を実感した。その多様な対象と方法のひとつとして、私の実証的研究方法とその由来を紹介したい。私は、伝統的な実証的研究の課題に言語理論の方法で取り組んできた。私が英語学の勉強を始めた1965年頃は、日本の英語学においてパラダイムシフトが進行中であった。伝統文法、構造言語学を同時に学び、趨勢はたちまち生成文法へと移った。philologicalな伝統文法研究を時代遅れとし、新しい言語学がとって代わる「進歩」は、同時に多くのものの喪失でもあった。

私は、伝統文法、構造言語学、生成文法、ロンドン学派の勉強をしたが、同時に辞書・辞典の執筆、編纂、QBの回答の**仕事**や語法**研究**も続けた。これらの仕事や研究にはあらゆる分野の知識が必要で、特定の理論には傾倒しなかった。定年後の三部作(『斎藤さんの英和中辞典』(辞書学・辞書史)、『英語にまつわるエトセトラ』(philology)、『現代高等英文法』(語法・文法))は私の3つの研究分野それぞれの集大成である。特に『現代高等英文法』の刊行に至る経過を辿り、独自の実証的研究の方法を語りたい。

人は世界をどのように認識し、ことばにしているか

安井 泉 (筑波大学名誉教授)

「英文法」は、「英語を正しく理解するための裏付けを与えてくれるよりどころである」。この哲学のもと、人は世界をどのように認識し、ことばにしているのかを、「形式と意味の対応」を指標に考える。ことばは写真でなく、絵画であるので、ことばにされるのは、話者の主観に基づいてデフォルメされて描写された世界になる。英文法という分野は、1970年以降、半世紀かけて、語用論や言語文化を取り込み守備範囲を広げると共に深化している。ことばが人間の認知を反映する仕組みが、解き明かされようとする最前線に立ち会うような例をいくつか挙げながら、英語ということばに向き合うことにする。1970年代から今までの英語学の姿を走馬灯を見るように振り返った後、コロナ禍の現代を、学者としてどう生きるかも視野に入れながら、すこし、ゆったりと英語を楽しむ。英文法は文学を正しく理解するのにどう役だっているのか、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』の翻訳で発見してきたことを交えて、すこし、やわらかめの話しをする。

語法・文法研究から語用論へ、あるいは語用論から語法・文法研究へ
内田聖二（奈良大学特命教授）

語用論 (pragmatics) は、言語学という学問分野のなかで、意味論と密接な関係をもつ、と言われてきた。(cf. Leech 1983 など) 一方、最近の語法研究、文法研究では、それまで「文脈」あるいは「コンテキスト」という用語でカバーされてきた言語事象を「語用論的意味」ないし「語用論的情報」という術語で置き換えて表現されるようになっている。本発表では、「語用論的言語現象」をより厳密に規定する必要があることを指摘し、語法・文法研究と語用論との相互関連性について考察する。具体的には、発話行為 (speech acts)、ダイクシス (deixis) といったなじみのある項目から始め、証拠性 (evidentiality) という言語類型論でよく取り上げられる概念にかかわる言語現象に言及する。なかでも、情報源を指定する according to NP と当該人物および情報源が関与する願望表現に焦点を当て、英語・日本語両方の側面から分析することで日英語比較への新しい視座を提供する。

英語語法文法学会役員

会長	中澤和夫			
名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
事務局長	西脇幸太			
会計	佐藤健児			
運営委員	五十嵐海理 住吉 誠 濱松純司 山本 修	大竹芳夫 出水孝典 林龍次郎 吉川裕介	金澤俊吾 中澤和夫 前川貴史 吉田幸治	吉良文孝 西脇幸太 松原史典
編集委員	大竹芳夫 (編集委員長) 牛江一裕 吉良文孝 西田光一 山岡 洋	大橋 浩 滝沢直宏 林龍次郎 吉田幸治	大室剛志 中澤和夫 松村瑞子	金澤俊吾 中山 仁 家口美智子

発行日	2022年9月15日
編集・発行	英語語法文法学会
代表者	中澤和夫
事務局	〒485-8565 愛知県小牧市大草 5969-3 愛知文教大学人文学部人文学科 西脇幸太 研究室内 TEL : 0568-78-2211 (代表) FAX : 0568-78-2240 (代表) Email: segu.office@gmail.com URL: http://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会 © 英語語法文法学会
